

文・理融合の、得がたい人材

—— 松永俊男教授退職記念号の刊行にあたって ——

人間科学会会長 深 澤 徹

社会学部教授の松永俊男氏が、本年3月、めでたく定年を迎えられ、退職される。については長らく「人間科学会」の会長職も務めてこられた教授の、本学会、ならびに大学に対する多大なる貢献をたたえ、本号を退職記念号として刊行するはこびとあいだった。以下に氏の履歴と、その業績を紹介し、巻頭のあいさつに代えたい。

松永教授は1939（昭和14）年、東京の芝で生まれた。戦中・戦後の混乱期を経て、54（昭和29）年には、日比谷高校に入学している。57年（昭和32）年には、東京大学教養学部理科2類に合格。専門課程は理学部生物学科の植物学を選び、学部卒業後もそのまま「生物化学」専攻の大学院へと進まれて、着実に学究の道を歩みはじめられた。

修士課程から博士課程を経て、1965（昭和40）年には東京大学理学部の助手職に就任。しかし「文・理融合」の必要を痛感されてか、その2年後には、東京大学文学部哲学科に、再度、学士入学されている。こうした選択の結果が、専門分化の進んで総合的視点を欠落させた現行の科学研究に対する批判の観点を培い、「文・理融合」の学問風土の中から生まれたダーウィン進化論についての、氏の後年の研究に、大いに活かされたものと思われる。

理系と文系相互にまたがるそうした学業研鑽のかたわら、加えて、数年にわたり講談社事典局において契約編集者としても勤務され、出版事情にも通ずる実務経験を積まれた。その経験が、後年の本学における図書館司書課程の講義担当や、学芸員資格課程の創設に活かされたものと思われる。

1974（昭和49）年には東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士を終えられ、3年の年月を経て、77（昭和52）年、本学経営学部の「科学概論」担当の助教授として採用され、東京から大阪へと居を移された。

以後、1987（昭和62）年には教授に昇格、この間、学内外の様々な業務をこなし、図書館長や情報センター長などの重要な役職を歴任された。なかでも、図書館司書課程の運営に尽力され、加えて博物館学芸員資格課程創設の際の氏の獅子奮迅ぶりには眼を見張るものがあった。その働きぶりは今でも伝説化して語り伝えられている。

その一方で、理系と文系の双方にまたがる立場を活かして、科学思想史の研究にも鋭意専念され、学術書の出版では定評のある名古屋大学出版会から矢継ぎ早に2冊の名著をものしている。その業績は斯界で高く評価され、2001（平成13）年には、東京大学より博士（学術）の学位を授与されている。

氏の業績は、著書5点、共著1点、学術論文に至っては二十数編を数える。なかでも主著となるのは、先にも述べたように、名古屋大学出版会から刊行され、日本におけるダーウィン研究を飛躍的に進展させたとの評価が高い『ダーウィンの時代 科学と宗教』（1996年）と、『ダーウィン前夜の進化論争』（2005年）の両書である。他にも87年刊行の『ダーウィンをめぐる人々』（朝日新聞社）、88年刊行の『近代進化論の成り立ち』（創元社）、92年刊行の『博物学の欲望 リンネと時代精神』（講談社現代新書）、05年には溝口元氏との共著『生物学の歴史』（放送大学教育振興会）がある。

最後に、個人的な思い出をいくつか。いわゆる一般教育課程の科目を主担当とする氏の学内での帰属は、一般教育懇談会から文学部へ、さらに社会学部へと幾度転じた。しかしどの部局にあっても、他の錚々たるメンバーに伍して、氏の発言には、万感の重みがあった。いつも冷静沈着、私情を交えることなく、絶えず法規に照らして妥当か否かの判断を下そうと努める、その公明正大な態度には、いかにも理系の間人らしい論理の明晰さが感じられた。とはいえ、原理原則にばかりにこだわるリゴリスト、というわけではない。その発想は実に柔軟。それも理系と文系の二つの世界を闊けてきた、氏の人

柄のなせるわざか。

本学にあつて、氏のような理系と文系の双方にまたがる人材は極めて貴重、かつ有益であつた。そうしたすぐれた人材がまた一人、本学を去っていく。なんとも寂しい限りである。たとえ学外にあらうと、今後も末永く、本学の行く末を見守っていただきたいと、切に願う。